

Tokyo Symphony Orchestra Monthly Concert Brochure

Symphony

12

2014 December



Symphony Lounge
[シンフォニー・ラウンジ]

音楽監督 ジョナサン・ ノットを語る

渡辺和彦

音楽評論

text by Kazuhiko Watanabe

TOKYO SYMPHONY ORCHESTRA MUSIC DIRECTOR

JONATHAN NOTT

2014年4月から東京交響楽団の音楽監督に就任したジョナサン・ノット。12月にはマーラーとブルックナーの大作ほかを指揮。2014年4月以降もブーレーズ、武満徹、ベルリオーズ、マーラー、シューベルトなどを組み合わせた極めて興味深いプログラムの演奏会を行ってきた。その趣旨や今後の展望について、楽団の音楽監督担当で営業本部長でもある辻敏氏に話を聞いた。

イギリス人ながらバンベルク交響楽団ほかドイツ語圏の楽団や歌劇場との関係が深いノット氏。公演プログラムやカップリングがさうとうユニークです。何か明確にやりたいことやコンセプトを持つてのことでしょね。
辻(以下、Tと略記) そういう人でないと、来てもらってもしょうがない(笑い)。「こういうことがやりたい」というものをはっきり持っている人です。

彼が東京交響楽団と最初に演奏した曲が、ドビュッシー「夜想曲」第3曲“シレーヌ”、

シェーンベルクのピアノ協奏曲、そしてラヴェル「ダフニスとクロエ」でした(2011年10月7日サントリーホール定期&10日ミュゼ川崎定期)。当時は前音楽監督のスダーン氏と“シェーンベルク”をシーズンテーマにしていた時期でした。

ノット氏はレパートリーがとても広い人です。バンベルク響とは2004年に初来日していますが、ドイツのオーケストラが日本に来るたびにブラームスとベートーヴェンばかりを演奏するというのは、もう飽きられているのではないかとっています。当団もスダーン





渡辺和彦氏

ン氏とのシリーズでシェーンベルクの時代まで来ていましたし、もともと現代作品も得意にしています。

ただ、ノット氏を音楽監督に迎えるというと皆さん「現代音楽をやるんですね」とばかりおっしゃる。もちろんやりますが、それが目的ではない。「誰々の曲をやりました」で完結するプログラムではなくて、“時代の流れを読む”こともあれば、全く相反するものをプログラミングしたり、そのコンセプトも様々です。

具体的に、春の公演を例にして演奏コンセプトの謎解きをさせてください。6月14日、サントリーホール定期。ブーレーズの「ノタシオン」のオケ版は本当に見事な演奏でした。その前にベルリオーズのオケ伴歌曲集「夏の夜」があったというのもわかるのですが、休憩後はシューベルトの「グレート」交響曲。そのココロは？

T あの日のコンセプトは「歌」「リーダー」なんです！シューベルトの「グレート」をシューマンが発見してメンデルスゾーンに初演を依頼し、そのシューマンがショパンやブラームスを見だし、そこからブルックナーやベル

リオーズへ、という流れと、ブルックナーからシェーンベルク、ウェーベルン、ブーレーズという流れです。リハーサルを聴いていますと、難解なノタシオンにおいても12音音階による複雑な楽譜からメロディーを見つけ出し、それを各楽器の奏者に引き渡していく作業を綿密に指示していました。ブーレーズからシューベルトまでを一晩のコンサートで廻り、そこに“歌”というコンセプトを貫いています。

個人的な感想ですが、「ノタシオン」は原曲のピアノ曲とオケ版とは全然違い、まるで別の曲を聴いているようでした。それと、舞台上に乗っていた人数も半端でない。出てきた音量も物凄く、あれは大変な11分でした。

T ブーレーズ、ベルリオーズ、シューベルト。一連の流れの中で、スダーン氏から引き継ぎ、そこにノット氏ならではのアイデアを加えたという意味でも“きれいな”プログラムだったかもしれません。もちろん聴いても美しい。

話が逆になりますが、2014年4月には、ウェーベルン「6つの小品」とシューベルトの交響曲第4番、ブラームスのピアノ協奏曲第1番がありました(26日ミュゼザ川崎、27日東京オペラシティ)。これは100年の間にウィーンがどれだけ変わったか、変わっていないのかというコンセプトです。その対比を明確にする為、ウェーベルンが終わるとすぐに次のシューベルトを演奏した訳です。

前任とまったく毛色の違う新しい指揮者がやってくるのも面白いのですが、今回のスダーン→ノットの場合は継続性が感じられ、聴き手の立場からすると、かなりわかりやすいです。

T スダーン氏の時代があったから、ノット

氏に対応できるのではないかと思います。ノット氏が言うには「30年前には、オーケストラはひとつの色で良かった」。たとえば「ジョナサン・ノットと東京交響楽団の音」といえば一つのスタイルで良かったし、それが求められた。しかし今は違う。一つのオーケストラでも曲によって違ったカラーを出さないといけない。

昔の東京交響楽団は、これもあくまでも個人的イメージですが、バワフルなでっかい音がして熱くて、でも細部はちょっと粗っぽいな、という、そんな感じでした。スダーン氏の時代になると、大きな音は出るのですがずいぶん、洗練されてきました。

T ノット氏の時代ではまたスダーン氏の時とは違うものが出てくるでしょう。彼はこれまで人生の四半世紀ほどをドイツで過ごしています。ドイツのオペラハウスでキャリアをスタートしました。彼はドイツ語がそうとうに堪能で、メンタリティもドイツ人に近いように感じます。

12月の演奏会は、マーラーの交響曲第8番「千人の交響曲」(7日ミュゼザ川崎)があり、定期はブルックナーの交響曲第3番初稿とワーグナー「ジークフリート牧歌」(13日サントリーホール)。こちらのカップリングは比較的理解しやすいです。

T これはそのままです。でもマエストロのちょっとしたユーモアが込められていて、「ジークフリート牧歌」を捧げられたコジマ・ワーグナーの誕生日はクリスマス・イブ、そしてノット氏の誕生日はクリスマスの日、と続いていることや、「ふたつのギフト」というコン

セプトがあります。ブルックナーの3番はワーグナーに献呈されていますからね。最初にこの曲をノット氏から提案されたとき、「ブルックナーは初稿で演奏しますよね」と連絡したら「もちろんです!」と返事が来ました。

あの交響曲の初稿形態は、第1楽章と第4楽章などよく知られた最終稿と全然違いますものね。そしてマーラーの8番。

T ノット氏本人が8歳の時に少年合唱団の一員として歌った思い出の曲で、バンベルク響と録音もしています。歌手も全て海外から招聘します。ノット氏と歌手の選定に3か月くらい費やし、ひとり一人過去の録音などをチェックしました。演奏人数は、「千人」はともかくとして、相当な人数となるでしょう。子供の合唱団が60から70人、大人の合唱団が250人前後、そしてオーケストラですからね。

楽しみにしています!



音楽監督担当 営業本部長 辻敏